

滅諦・涅槃・彼分涅槃

吉 元 信 行

一 はじめに

瑜伽行派の論師「無著(Asaṅga)」は種々の論書を述作して、唯識思想を大成した。その代表的論書は、大乘阿毘達磨經に基づいて諸經論の唯識説を組織的にまとめあげた『撰大乘論』、唯識説の実践道を説き示す瑜伽師地論の綱要書としての『顯揚聖教論』、及び小論において問題にしようとする『阿毘達磨集論』である。

阿毘達磨集論(Abhidharmasamuccaya 以下「集論」と略す)は、無著が、瑜伽師地論(以下「瑜伽論」を始め、唯識系諸經論を再組織して、従来の阿毘達磨論に新解釈を加えることによって、アビダルマ的方法論で唯識思想を理論付けした論書である。このように、集論は大乘の論書としては特異な方法論で述作された論書であるから、

その所説も、同じ唯識系論書と異っていることが時おり認められている。例えば、見道説を例にとると、集論では、瑜伽論に散説された見道説を集めてまとめた限りにおいては、瑜伽論に改良を加えたと言うことができるが、瑜伽論において暗示的・単一的・大乘的であったものが、集論では顯示的・分析的・小乗的なものへとなっているという事実が先学によって指摘されている。^①また、集論では、人無我を説くのみで、法無我を説くに至っていないということも既に報告されている。^②

以上のように、集論ではその随所に小乗的・アビダルマ的傾向が認められている。集論がそのようなアビダルマ的傾向をもっている理由として、次の二点のうちのどちらかが想定される。第一は、唯識思想をアビダルマ的方法論で理論付けしたということである。第二は、集論

の思想がアビダルマ思想から唯識思想へと展開していく過渡的位置にあるのではないかということである。このどちらの理由であるかについては更に検討を要するが、集論の所説と撰大乘論等の唯識論書の所説とに相違している点があるという点で、無著の著作のうち、集論を他の著作と区別して考えてみる必要があろう。

集論において無著は、本論書を *Abhidharmasamuccaya* と称する理由を語源分解 (*nirukti-hyāya*)^⑤ によって次の様に説明している。

この論は何故に *Abhidharmasamuccaya* と称するのか。

(1) 俱に証得して (*saṁetya*) 結集 (*uccaya*) であることによつて、(2) あまねく (*samantāt*) 引撰 (*uccaya*) であることによつて、そして (3) 正しく (*samyak*) 卓越 (*uccatva*) の処 (*āyatana*) であることによつて、といひある^⑥。

この三無著は *Abhidharmasamuccaya* という書名における *samuccaya* に三種類の語源分解を与え、本論書の思想的位置づけをしている。第一は、釈論 *Bhāṣya* に「諸菩薩が真理を現觀し (*abhisametya*)、証悟しつ (*adhi-ganya*) 結集する (*saṁkalana*) から」と説明しているように *samuccaya* を *saṁ-uccaya* と分解し、*saṁ* を *same-tya* (俱に証得して) と理解し、*uccaya* を *ud-√ci* (to gather)

よりできた語であると理解したのである。また *saṁetya* としたのは、*viniscaya* (決択) におけると同様に *uccaya* の語根を *to observe* を意味する *√ci* であるとも理解したのであろうか。^⑦

第二は、釈論に「〔大乘〕阿毘達磨經 (*Abhidharmasūtra*) よりあらゆる思択の論題 (*cinta-sthāna*) を撰する (*saṁ-graha*) からである」と説明しているように *saṁ* という接頭辞を「遍く」の意にとり、*uccaya* を第一義と同様に理解したのである。ここに本論書が大乘阿毘達磨經に基いて述作されたことが窺われる。この大乘阿毘達磨經 (*Abhidharmasūtra*) なるものは現存しておらず、集論や撰大乘論等いくつかの引用を見得るのみである。^⑧

第三は、釈論に「顛倒のない方便によって乃至佛たることを証得するから」となされていることから、*saṁ* を *samyak* (正しく) と理解し、*uccaya* を *ucca* (高) + *ya* (|| *āyatana*) というように分解したのである。^⑨

ここに、本論書が、諸菩薩の悟った教えを結集したものであり、大乘阿毘達磨經の思想を遍く撰めたものであり、佛果を証得する卓越した処であることを、無著は論名の語源より導き出している。このような立場で、本論書において説かれた思想を、ここに大乘阿毘達磨思想と

呼ぶことにしたい。佛教思想史上におけるこの大乘阿毘達磨思想の位置づけをするには、集論に説かれた内容の一一を詳細に検討し、他の思想との比較をする必要がある。筆者はこのような立場で集論について既にいくつかの論攻を発表した。^⑨ 其中で、最近、集論における滅諦についての検討を試みたことがあったが、紙幅に限りがあったふれられない点が多かったので、小論ではそれを補いつつ検討を加えることによって、滅諦・涅槃觀についての大乘阿毘達磨思想の特質を究明してみたい。

二 滅諦の本質

滅諦なる概念は、種々の佛教学派において多様に把握されており、各学派間において種々の論議を呼んできた。小論では瑜伽行派の論書である集論における滅諦説ととりあげる。集論において滅諦の説かれるのは第二章諦決択 (Satya-viniścaya)^⑩ である。そこでは先ず、諦決択とは苦・集・滅・道の四諦であることが明らかにされる (ASg p. 30¹⁹)。

この中で、第一の苦諦について、集論では「かの有情の出生 (janman) に関して、出生の依処 (adhiṣṭhāna) に関して〔苦諦〕である」 (ASg p. 30¹⁹) と説かれる。釈論

では、「その有情の出生と出生の依処とは、何が生ずるかと言えば (Yas ca jāyate)、有情世間であり、どこに生ずるかと言えば (Yatra ca jāyate)、器世間であり、その両方が苦であるということになる」 (ASBh p. 49¹⁹) と説明されている。ここで、三界の有漏の果たる有情世間と器世間とが苦であることが明かにされている。

第二の集諦について集論では、「煩惱と煩惱によって増上されるべき〔有漏〕業である」 (ASg p. 32¹) と説かれ、釈論では、「それより苦が生起するのが集諦である」 (ASBh p. 55¹) と註釈される。集諦の何たるかについては佛教諸派に異説があり、阿毘達磨諸論師が諸の有漏法の因となるものを集諦となすのに対して、集論では、譬喩者の説と同じく、煩惱と業を以て集諦としていることが注目される。

ところで、小論において問題にしようとするのは第三の滅諦についてである。集論において滅諦に閑説する部分は丁度梵文の散逸部分であるので、チベット訳、漢訳及び釈論 (Abhidharmasamuccayabhāṣya) によって読解する^⑪。この滅諦について集論では次の様に説く。

滅諦とは何れ (katama) であるか。(1) 相 (saṃyama) に関して、も、(2) 甚深 (gambhīrya) に関して、(3) 世俗 (brāhmaṇa, saṃ-

⁽⁴⁾ *heita* に関しても、⁽⁴⁾勝義 (*paramartha*) に関しても、⁽⁵⁾不円満 (*aparipuri*) に関しても、⁽⁶⁾円満 (*paripuri*) に関しても、⁽⁷⁾無莊嚴 (*niralanikara*) に関しても、⁽⁸⁾有莊嚴 (*salanikara*) に関しても、⁽⁹⁾有余 (*lhag ma dan bcas pa, svausesa*) に関しても、⁽¹⁰⁾無余 (*lhag ma med pa, nir-avasesa*) に関しても、⁽¹¹⁾最勝 (*khvayd par du bphags pa, viśiṣṭa*) に関しても、⁽¹²⁾異名 (*pariyāya* 差別) に関しても滅諦である。

ここに集論では滅諦について以上十二の観点から分析がなされる。先ず第一の相に関する分析によると、真如 (*tathatā*) と聖道 (*mārga*) と煩惱の不生 (*kleśa-mi bhvyun ba*) という三つの相に関して滅諦が説明される。此処に相当するプラダンの還元梵文 (ASp p. 62r-18) では、藏・漢訳が正確に読まれているとは思えないので、漢・藏訳によって三つの相とその説明の対応を示すと次の如くである。

真如 若滅依 (*gan du hgog pa*)

聖道 若能滅 (*gan gis hgog pa*)

煩惱の不生 若滅性 (*gan hgog pa*)

すなわち、滅諦は、いずこにおいて滅するか (*yatra nirodha*) といえ、滅の依たる真如という相をもち、何によって滅するか (*yena nirodha*) といえ、能滅たる聖

道という相をもち、何が滅するか (*yo nirodha*) といえ、滅性たる煩惱の不生という相をもつのである。尚、この集論における滅諦の三相についての所説が、無性や安慧の大乘莊嚴經論註 (チベット訳のみ現存) に引用されていることが先学によって報告された。⁽²⁰⁾ 又、プトンは集論註において、この三種の滅諦の相について、真如は滅の依 (*śū*) であり、聖道は方便 (*thabs*)、煩惱の不生は寂滅即ち滅の自体であると説明する (BASi 563~4)。

集論では次にこの滅諦の相について次の如き經典を引用する。

(一) あるところにおいて、眼と耳と、同じく鼻・舌・身と、意と、同じく名色とが残りなく滅する。

(二) あるところにおいて、眼 (*mig, cakṣus*) が滅し、顯色 (*kha dog, varṇa*) がなくなり、乃至意が滅し、法の想がなくなる。⁽²¹⁾ それをこの処 (*gnas*) において知るべし (ASi 107b-108a)。

ここに引かれた經典の出典は定かでないが、その内容は長部^{ディガニカヤ} 22 大念処經に説かれる滅諦の解説に係が深いと思われる。⁽²²⁾ その部分はいささか冗長であるので、くり返し等を省いて訳すと次の如くである。

どれだけが苦滅聖諦であるか。まさにその渴愛の残らない

離欲、減があり、捨があり、棄捨があり、脱があり、無執著がある。しかるに比丘らよ、この棄捨せられんとする渴愛はどこにおいて (kattha) 棄捨せられ、滅せんとする「渴愛」はどこにおいて滅するのか。世間において愛しいもの、愛しいものがあれば、この棄捨せられんとする渴愛はここにおいて (ettha) 棄捨せられ、滅せんとする「渴愛」はここにおいて滅する。いかなるものが世間において愛しいもの、愛しいものであるか。眼・耳・鼻・舌・身・意は世間において愛しいもの、愛しいものである。この棄捨せられんとする渴愛はここにおいて棄捨せられ、滅せんとする「渴愛」はここにおいて滅する。色…乃至…法、眼識…乃至…意識…眼触…意触…意触所生受…色想…乃至法想…法思…法尋…法伺は世間において愛しいもの、愛しいものである。この棄捨せられんとする渴愛はここにおいて棄捨せられ、滅せんとする「渴愛」は滅する。比丘らよ、これが苦滅聖諦と言われる。(D II pp. 310-311. 集論と関係するところを——で示す。)

この大念処経に説かれるところは、集諦において説かれた、苦の原因たる渴愛の滅するところを探索して、そのたどりついたところが滅諦であると言っているのである。その探索の過程は次の如くである。先ず、渴愛の対象となるものは、世間において愛しいもの (piya-rūpa)、愛しい

もの (sāta-rūpa) である。それらの具体的内容は、人間の感覚器官たる眼等の六根であり、あるいは感覚の対象たる色等の六境であり、それらの和合たる眼識等の六識である。それらは更に触、触所生受、想、思、尋、伺というように分析されていく。

先に引用した集論の所説によると、(一)は六根の滅を説き、大念処経に説かれる色以下を名色の滅としてまとめ、(二)の引用は、その名色を開いて説いたものと言えよう。従って、この集論の所説は大念処経、若しくはそれに近い經典の取意引用であると見ることができる。そのように見ると、先のニカーヤで説かれた「ここにおいて (ettha)」という語が集論の所引のチベット訳では gnas (adhishtana) と訳されているのは何らかの思想的発展を意味すると思われる。というのは、ここに無著は「真如」という滅諦の相を認めているからである。

この大念処経の佛音による註釈によると、南伝アビダンマでも、滅諦に聖道と煩惱の不生に相当する概念が認められている。^②しかし、説一切有部では、滅諦すなわち寂滅は実体であると思倣すから、煩惱の不生の位に仮に寂滅を得るとは説かない。^③ところが、集論では滅諦に聖道と煩惱の不生という相を認めるとともに、更に真如

という相も認めようとする。ここに滅諦の本質に関する大乗阿毘達磨思想の特質を窺うことができる。

三 甚深・涅槃

次に、滅諦について第二の分析は、「(2)甚深に関して」という観点から為される。すなわち、「それら諸行の寂滅(uparama)とかの滅は異なっているか」という質問に對して、その関係は甚深であるから説くことはできないということで、次の如き四句分別によって滅諦の甚深なることを論証する(Ast 108a, 大正・31・六八一c)。

- (一) 異と説くべからず
 - (二) 不異と説くべからず
 - (三) 亦異亦不異と説くべからず
 - (四) 非異非不異と説くべからず
- このことを釈論では次の如く注釈する。

「それら」諸行の寂滅(uparama)と、かの滅とが異なっている(anya)とすれば、それと関係していない「滅」は別の意味になるであろう。若し異っていないとすれば、「その」滅は維染なる相(alasana)をもつことになる。それ故に、まさに「異・不異の」両方でもなく、両方でないこともない。^②

すなわち、有為である諸行がそのまま無為たる滅になるということは実に不可思議であり、深遠にして推し量ることができないというのである。瑜伽論六十八を見ると、次の如く四種の過失に配当している(大正・30・六七四a)。

- (一) 有異 増益過失
- (二) 無異 自相邪分別過失
- (三) 有異亦無異 相雜亂過失
- (四) 非有異非無異 損減過失

瑜伽論によれば、これら四種の過失を遠離することが滅諦であるとされる。その中で、(一)有異とは、滅という不可説なるものを諸行と異っているとまちがって承認するという誤謬である。(二)無異とは、諸行と滅の本質を邪に分別するため、両者は異っていないと判断する誤謬である。(三)有異亦無異とは、両者は異っていて同時に異っていないとするのであるから、両者の相の把握が混乱してしまうという誤謬である。(四)非有異非無異とは、両者が異ってもいないし異っていないこともない和无意味な否認をするという誤謬である。

次に集論では、滅諦が甚深である理由として「無戲論(nisprapañca)であるから」と説かれ、それに対して「戲論

(prapañca) というのは、この場合、不如理思議 (ayoniśas cintya) である」と説明される (ASc 108a³)。この不如理思議 (非正思議) について、漢訳集論では「道に非ず、如に非ず、亦、善巧方便の思に非ざるが故に」 (ASch 681c) という説明が加わっている。^② 戲論すなわち不如理思議とは、聖道によらず、正理 (nyāya) によらず、道理 (naya) によらず思惟することである。

以上の如く、無戲論であるから滅諦は甚深であるとする根拠に、無著は次の如き經典を引用する。

六触処の消尽、離欲、滅、寂靜、滅没と異ったものが有るといえば、無戲論を戲論せしめる。あるいは、異ったものが無いとか、「異ったものが」有って無いとか、異ったものが有ることもなく無いこともないといえば無戲論を戲論せしめる。六処がある限り戲論もある。六処が減すれば戲論も滅する。「それが」涅槃であると説かれた。 (ASc 108a⁴)

ここに引用された經典の典拠について、一応、雜阿含二四九經をあげることができよう。この雜阿含と比較を容易ならしめるため、漢訳集論の所引と対比すると次の如くである

集論

雜阿含二四九經 (抄)

此六触処尽、離欲、滅、寂——六触入処尽、離欲、滅、息、

靜、没等、若謂有異、若謂無異、若謂亦有異亦無異、若謂非有異非無異者、於無戲論便生戲論。乃至有六処可有諸戲論。六処既滅、絶諸戲論、即是涅槃。

(大正・31・六八一c)

没已、更有余耶……無有余耶……有余無余、非有余非無余耶……亦不応説。
……六触入処……此則虚言。
……若言六触入処尽離欲滅息没已、離諸虚偽、得般涅槃。此則佛説。
(大正・2・六〇a)

この雜阿含二四九經は、阿難が舍利弗に質問する場面である。六触入処 (『六触処』) が滅した場合、ほかに何かあるかそれともないか……云々という阿難による四句の質問に対して、舍利弗は、そう言うことは虚言 (『戲論』) であるから、そのように言うべきではない、六触処の滅こそ涅槃であると説くのが佛説である、と答えるのである。集論の所引は、訳語のちがいがいそあれ、まさにこの經の抄訳であるといえることができる。そこで、この經の意味をさらにはっきりするため、ひいては、集論所引の經典の原語を推定するため、この漢訳經典に相当するパーリ増支部一七四經 (A II pp. 161~162) を見ることにしよう。

漢訳の対告衆阿難に当たるところが、このパーリでは

Mahakotiṭṭha となっていて、漢訳とは別人になっている以外はこの漢訳とパーリの所説はほぼ一致する。

先ず、漢訳の「六触入処尽離欲滅息没已更有余耶」に当るところ、パーリでは “channam āvuso phassa-tanānam asesā-virāga-nirodhā atthi aññaṃ kiñcīti.” (具寿よ、六触処の残りなき離欲・滅より他に何かが有るか) となっている。ここに挙げた如く、先の四句の中の(1)有余(有異)のパーリは、atthi aññaṃ kiñcīti であった。他の三句については次の様になっている。

- (2) 無有余 (無異) n'atthi aññaṃ kiñcīti
(3) 有余無余 (亦有異亦無異) atthi ca n'atthi c' aññaṃ kiñcīti

- (4) 非有余非無余 (非有異非無異)

n'ev' atthi no n'atthi aññaṃ kiñcīti^③

これら四句の中で、(1) atthi aññaṃ kiñcīti にて、佛音は次の如く注釈する。

これら「六触処」が残りにく滅したとき、それ以外の何か少量の煩惱でも有るのかと問うのである。

(A-a III p. 150¹⁰⁻¹¹)

ここで我々は、この經典について、佛音と無著の間に理解の相違のあることを見出すであろう。佛音は、anya

(有余||有異)を六触処の滅以外のある少量の煩惱というように理解した。パーリ原典に kiñci (ある何か) という語があることから、パーリでは一般にそう理解したと言っても良いであろう。漢訳雜阿含の「有余」なる訳語も、そういう理解を妨げるものではない。ところが、集論におけるこの經の引用を見ると、その理解の仕方が異なってきた。すなわち、パーリで「滅以外の何か」としたところを、集論のチベット訳を見ると、諸行の寂滅以外の他の滅というように読め、パーリの kiñci に相当する訳語がチベット訳には認められない。そして更にその釈論になると、諸行と滅の關係が異なっているかどうかというように理解されてくる。

次に、「非戲論を戲論する」ということをパーリでどのように理解しているかを見よう。これに相当するパーリは、appapañcam papāñceti (A II p. 161²⁹) である。これを注釈では「戲論すべきでない理について戲論を為す (nappapañcetaḍḍa-tīḥane papāñcam karoti) 行うべきでない (anācariṭṭa) 道を行う」(A-a III p. 151) と説明される。そして、これら六触処がすべて絶滅したとき戲論が滅するのであり、それが涅槃であると理解される。集論における甚深に関する以上の如き滅諦の分析は、

瑜伽論六十五で、五相^⑤によって無為の諸法の差別を建立する^⑥ときの所説と関係が深いと思われる。そこでは次の様に説かれる。

即是此中五相滅、有為法証得涅槃。若謂涅槃為有異者、當知此為不如理問・不如理答・不如理思。如是若謂為無異者、有無異者、非有非無異者、當知皆是不如理問・不如理答・不如理思。何以故。由彼涅槃唯有為滅之所顯故、与有為法其相異故。唯有為滅之所顯故、謂有異者、若問・若答・若思便為戲論、非所戲論。与有為法其相異故、謂無異者、如前廣說便為戲論、非所戲論。総如前說二種因故、亦有異不異、不応道理。由有為滅証涅槃故。若謂一切皆無所有異故說非有異、非無異者、不応道理。涅槃義者、謂一切白法所顯發故。涅槃相者、謂寂滅相無戲論相。當知唯是内所証相。(大正・30・六六二c) (傍点筆者)

以上の如く、瑜伽論において、有為法の滅は涅槃であるが、その滅と涅槃に関するいかなる問も答も思察も戲論にすぎず、寂滅にして無戲論なることこそ涅槃である^⑦と説かれた。この瑜伽論の所説は、集論における甚深に関する滅諦の説明と軌を一にするものである。集論では、六触処の滅が無戲論であり涅槃であると説かれた。ただ、

その有為たる諸行の滅と無為たる涅槃の關係が不可思議であり甚深であるのとらえ方は大乘阿毘達磨思想の特質であると言えよう。

四 彼分涅槃

集論における滅諦についての第三の分析は「(3)世俗(samketa)に關して」という観点からなされる。それについて次の様に規定される。

世間道によつて「煩惱の」種子が隱伏された(āram smad pa, āpavīta)^⑧から滅である。それ故に、世尊によつて、別名、彼分涅槃(dehi yan lag gis mya gan hda pa, tadanga-nirvāṇa)と説かれた。(Ast 108a⁹)

ここにおいて説かれた滅は、世俗的仮説として、世間的行法をもつて煩惱の種子を隱伏することによって得られる滅である。この滅においては、未だ煩惱が種子として隱藏されており、眞の涅槃ではないから彼分涅槃と呼ばれるという。この彼分涅槃の語義については集論及びその釈論に言及はないが、その原語はチベット訳 dehi yan lag gis mya gan hda pa からすれば、tadāṅgena nirvāṇam あるいは tadāṅganirvāṇa^⑩であつたと想定される。この彼分涅槃なる概念は、後述する様に、後の唯

識学派では重要なタームになってくるが、この用語はパーリニカーヤ等にも認められるので、諸資料における語義及びその変遷について論述しよう。

パーリでこの彼分涅槃なる概念の認められる最も古い資料は相応部 22・43 自洲 (atta-dīpa) という経である。そこでは、釈尊が比丘らに自己を洲とし、自己を帰依所とし、他を帰依所とせず、法を洲とし、法を帰依所とし、他を帰依所とせず住せよと教え、更に次の様に説く (S III pp. 42~43)。

比丘らよ、色について無常・変易・離貪・滅を知り、前の色も、今の一切の色も無常・苦にして変易の法である。

このようにこれを如実に正慧をもって観ずれば、愁・悲・苦・憂・悩が断じられる。それらが断じられるから、恐怖せず、恐怖しないから安楽に住する。安楽に住する (suham viharati) 比丘は彼分涅槃者 (tadaṅganibbuta) と言われる。

すなわち、正慧によって苦を断じた安楽に住する者が彼分涅槃者と言われた。この中の彼分 tadaṅga なる語は、コンパウンド tat + aṅga から成っているが、tat 及び aṅga がいかなる意味に用いられているかははっきりしていない。そこで、この相応部の佛音による註釈を見ると「かの毘鉢舍那の因 (aṅga) によって諸煩惱が覆われている (nibbuta)

から彼分涅槃者である」と註釈される。ここで佛音は tat を毘鉢舍那 (vipassana) ʼ aṅga を cause の意味にとっているようである。従って、佛音はここにおける彼分涅槃者を、かの毘鉢舍那を立場として得られた煩惱の覆われた者というように理解している。集論において、世間道 (有漏道・世俗道) を以て煩惱の種子を隠伏することによって得られた滅を彼分涅槃とするのは、この佛音の理解と軌を一にする。

また、増支部 9・50 では彼分涅槃 (tadaṅga-nibbāna) なる語があげられている。ここでは、現見涅槃 (sanditṭhi-kam nibbānam) ʼ 涅槃 (nibbānam) ʼ 般涅槃 (parinibbāna) ʼ 彼分涅槃、現法涅槃 (dīṭṭhadhamma-nibbānam) という五種の涅槃のうちの第四にあげられている。佛音の註釈によると、「彼分涅槃とは初禪等のそれぞれの因による涅槃である」とされる。

このような彼分涅槃に似た概念として、南伝では、彼分寂靜 (tadaṅga-santi) ʼ 彼分解脱 (vimutti) ʼ 彼分断 (ppahāna) ʼ 彼分捨離 (vivēka) ʼ 彼分滅 (nirodha) 等の用語が認められる。例えば、Mahānidessa では寂靜 (santi) を次の三種に分けて説明している (Nidd I p. 74)。

(一) 究竟寂靜 (accanta-santi) 甘露なる (amata) 涅槃。

(二) 彼分寂靜 (tadaṅga-) 初禪乃至非想非非想處に入
定せる者には諸蓋乃至無所有処想が寂靜となる。

(三) 世俗寂靜 (sammuti-) 六十二の悪見と見寂。

ここに彼分というのは、甘露なる完全な涅槃でもなく、
また世俗の見寂でもない、色・無色界の定に関して用い
られていることがわかる。先のニカーヤに対する佛音の
註釈もこの立場である。

ところで、無礙解道では、^{パライサレディマウガ} 彼分滅が説かれる。そこ

では、離・離貪・滅・捨離の一一に、消除 (vikkambana)
・ 彼分・断絶 (samuccheda) ・ 止息 (paṭipassaddhi) ・ 出離
(nissarana) の五種の仕方のあることを説く。その中で、
彼分滅 (tadaṅganirodha) にこゝに、「見行者 (dīṭṭhigata)
の中で、順決択分 (nibbedhabhāgya) の定を修す者の〔滅〕
である」と説明する (Ps II p. 222)。また、解脱道論一
では、伏・彼分・断・猗・離の五解脱を説いて次の様に
説明している。

伏解脱 現に初禪を修行し諸蓋を伏す

彼分解脱 現に達分定を修し諸見より解脱する

断解脱 出世間道を修し能く結を滅除する

猗解脱 果を得る時の楽心

離解脱 無余涅槃 (大正・32・三九九c)

この彼分解脱における達分定とは順決択分の定のこと
であるから、これは先の無礙解道における彼分滅に相当
する。順決択分とは凡夫位にあって、世間道である。こ
こに先の佛音の理解による彼分涅槃が、伏・彼分兩解脱
で説明されている。清淨道論註において彼分解脱が「欲
界繫の善心である」^⑭と説明されているのはこの彼分解脱
に関連しよう。この解脱道論における五種の解脱は、集
論における世俗から無余に至る滅諦の分析と関連がある
ようである。以上の様に無礙解道や解脱道論では寂靜・
解脱ではないが、それらに似た定の概念に彼分寂靜・解
脱等の名称を与えている。

このことは、瑜伽論十一に、定の通名の中の一として
の彼分涅槃の説き方と軌を一にする。そこでは、諸靜慮
の名に、増上心・現法樂住・彼分涅槃・差別涅槃・出諸
受事の五種の通名があり、その中の第三の通名であると
される。そして、彼分涅槃と称する理由は、諸煩惱の一
分を断じているというだけで、眞実決定の涅槃ではない
からである。^⑮ブトンも集論註において、この涅槃を仮な
るもの (bhāga Pa)、であるとし、余り無く出離しておら
ず、煩惱の一分を断じたもので、一向に決定していない
から彼分涅槃であると説明する。^⑯

この彼分涅槃には後の唯識系論書において次の如き二つの解釈があるとされる。^④

(一)煩惱を伏して顕わる所の理は、是れ眞の涅槃の小分なるが故に、故に彼分と名づく。

(二)四禪等に有る所の淨定は煩惱を伏すに由て寂靜の義あり、名づけて涅槃と爲す。是れ有爲なるを以ての故に彼分と名づく。分とは相似流類の義にして、惑なき辺によって寂靜の義あり。眞の涅槃と稍相似せるが故に彼分と名づく。

ここで、(一)は彼分 *tadāṅga* における *tat* を涅槃、*āṅga* を部分の義に理解している。(二)では *tadāṅga* を有爲と解釈しているから、先のパーリにおける解釈に通じるであろう。その毘鉢舍那あるいは色・無色界の定の因による涅槃すなわち、涅槃に相似した涅槃ということで、*āṅga* に相似流類の義が求められたのであろう、パーリの *āṅga* にも種類という意味がある。^⑤ここに第二義の解釈がパーリ以来の解釈に基づいていると言ふことができる。いずれにせよ、ここでは煩惱の伏ということが強調されているが、説一切有部アビダルマでは、煩惱の伏・断の別を立てず、^⑥有漏道さえも断道であるとした。従つて、涅槃に似て涅槃でない彼分涅槃という涅槃を立てることはなかった。しかし、集論では、有漏道は煩惱の現行を伏す

るだけで、煩惱の種子までも断することはできないという立場から彼分涅槃を立てたのである。このような立場は、原始佛教以来の思想に基づいて形成されていることが、彼分涅槃なる用語を通して究明された。

五 滅諦の種々相

彼分涅槃として説かれた世俗的滅に対して、次に(4)勝義としての眞の滅が説かれる。世俗的滅が煩惱を隠伏したのに対して、この滅は「聖慧によって「煩惱の」種子が根絶されること(*samudghāta*)である」(*ASt* 108a⁷⁻⁹)とされる。世俗的滅は煩惱の種子を仮に穩伏して、表に現わさなければ完全に滅したことはないが、勝義的滅は、それを根絶してしまい、完全に滅した状態であるといふのである。

(5)不円満に関して、(6)円満に関して、という二種の滅は四沙門果に関して説かれる。すなわち、(5)は預流・一來・不还果という諸有学者の滅であり、(6)は阿羅漢果という諸無学者の滅であるという。ここで、円満とは、当該の最高に達するという意味である。^⑦(7)無莊嚴に関して、(8)有莊嚴に関してという二種の滅は、(6)の諸無学者の滅の中でも更に上位の(7)を慧解脱阿羅漢における滅、

(8)を俱分解脱阿羅漢における滅として説明している。すなわち、退法から不動法阿羅漢に至る七種阿羅漢における滅を(6)とすれば、(7)は、未だ滅尽定を得ず、ただ智慧の力によって煩惱障のみを解脱した慧解脱阿羅漢の滅であり、(8)はすでに滅尽定を得し、慧と定との力によって煩惱・解脱の二障を離れた俱分解脱阿羅漢の滅を言うのである。⁴⁸この中で、有莊嚴(sāṃkara)という意味は、釈論によれば、三明や六通などの勝れた徳をもっていることであるという。慧解脱阿羅漢にはこれらの勝れた徳の莊嚴がないから無莊嚴(nirāṃkara)と言われたのである(ASBh p. 74)。

有莊嚴たる俱分解脱阿羅漢の滅の次に、集論では、(9)有余に關して、(10)無余に關して、(11)最勝に關してという三種の滅をあげる。その説明によると、(9)を有余依滅(sopadhiśa-nirodha)、すなわち有余涅槃、(10)を無余依滅(nirupadhiśa-nirodha)、すなわち無余涅槃、(11)を無住処涅槃(āpatisīhita-nirāna)に配当する。この三は、言うまでもなく、唯識の究竟位たる四種の涅槃のうち後三の涅槃に相当する。

說一切有部アビダルマでは、有余涅槃というのは、諸漏の尽きた阿羅漢であっても、寿命がなお存し、四大種

と所造色の相續が未だ断ぜず、五根身による心相續が轉ずるといふ余の依があるからであるとされる。また、無余涅槃は、その阿羅漢の寿命が滅し、色身の滅した場合の涅槃である。⁴⁹すなわち、有余とは阿羅漢の現身で、無余とはその死後のことであるという考え方で、南伝アビダンマでも同様の考え方をとる。⁵⁰集論におけるこの両涅槃は、俱分解脱阿羅漢の滅と無住処涅槃という佛・菩薩の滅の間に配置せられているから、アビダルマにおける理解とはいくぶん相違していると思われる。しかし集論や釈論にはその説明がないので、瑜伽論を見てみると、滅諦を説くところで、「煩惱滅するが故に有余依の滅諦を得て、依の滅するが故に無余依の滅諦を得る」(大正・30・六七四a)と説明されている。また、瑜伽論の「撰決」中有余依及無余依二地⁵¹章において有余・無余両涅槃についての詳しい説明がある。そこでは、無余依に住する者は、有情として定められた者とはならず、諸苦を離れ、その者の得た転依は六処と相應しないとされる。

しかし、六処と相應しなくとも、その転依は六処を因とせず、真如の境を縁じて道を修することを因とするのであるから滅することはないという。ここにおいて、瑜伽行派において説かれる無余涅槃は、寿命や肉体の滅に関

係なく、迷いの存在の根拠の転換たる転依は無戲論の相であつて、有であると説かれてゐる。

ところで、瑜伽論では、無余涅槃の解説の最後に秘密門を釈する中で次の様に説く。

復次彼即於此住処_レ転時、如_レ無死畏、如_レ是亦無老病等畏、如來亦爾。彼及所余於無余依涅槃界中、般涅槃者、於十方界當_レ知究竟不可思議。数々現_レ作一切有情諸利益事、如首楞伽摩三摩地中說幻師喻（中略）。是名最極如來秘密。（大正・30・七四九b～c）

瑜伽論におけるこの所説は、集論において最後に挙げられる(1)最勝に關しての無住処涅槃に該當する。すなわち、アビダルマでは最高の涅槃とされた無余涅槃の上に、集論では更に「一切有情を利樂することに安住する」(Ast 108b)という佛菩薩の無住処涅槃が考えられているからである。瑜伽論では無住処涅槃なる用語は認められないが、先の引用の如く、それに相當する概念の萌芽が無余涅槃の説明に認められる。この様な概念は、解深密經四に「謂諸菩薩能善了_レ知涅槃樂住、堪_レ能速證_レ而復棄_レ捨速_レ証樂住_レ無緣無待_レ大願心、為_レ欲_レ利_レ益諸有情_レ故、処_レ多種種長時大苦」(大正・16・七〇四c～七〇五a)と説かれる中にも認められるであらう。ただ、無

余涅槃より無住処涅槃を別出したところに大乘阿毘達磨思想の特質があるといふことができる。尚、最後の「(2)差別に關して」は、滅諦の異名についての論述であり、これについては機を改めて別稿を試みたい。

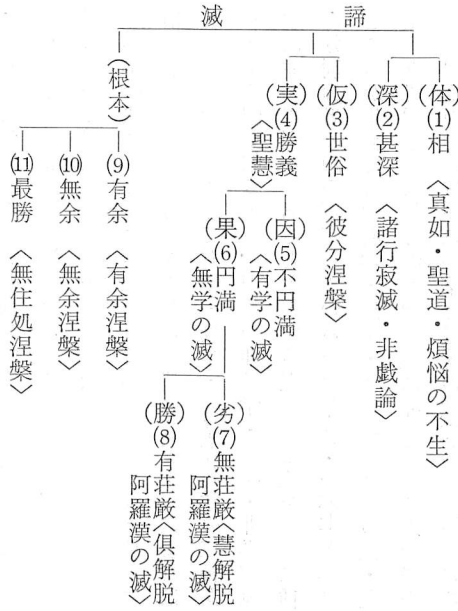
六 滅諦の構造

以上述べた集論における滅諦についての十一種の分析は、そのまま大乘阿毘達磨思想における滅諦の構造を示しているといふことができる。このことについて、雜集論述記八では次の如く略説する。

滅諦中分六。一_レ弁_レ体、二_レ明_レ深、三_レ假_レ実、四_レ因果、五_レ勝劣、六_レ根本。（統藏74・四二〇右上）

ここでは、集論における滅諦の分析を六種にまとめている。先ず第一に、「(1)相に關して」は、滅諦の体すなわち本質を三つの相という形で弁ずる。第二に「(2)甚深に關して」は、甚深なる様態としての滅諦の深さを明かにする。第三に「(3)世俗に關して」と「(4)勝義に關して」は、滅諦の仮と実のすがたを表わす。第四に、「(5)不円満に關して」と「(6)円満に關して」とは阿羅漢の滅への因果を示す。第五に、「(7)無莊嚴に關して」と「(8)有莊嚴に關して」とは、阿羅漢果の滅の中にも劣なる状態と

勝なる状態のあることを明し、第六に「(9)有余に關して、「(10)無余に關して」と「(11)最勝に關して」の三は根本の涅槃であることを明すのである。以上論究してきた滅諦の構造を図示すると次の如くなる。



ここに、有莊嚴なる俱分解脫阿羅漢の滅の上に更に有余・無余・無住処の三涅槃の説かれていることが注目される。この三は、周知の如く、唯識学派に説かれる四種涅槃の後三の涅槃であるからである。四種涅槃の第一の

本来清淨涅槃は、滅諦のところでは説かれていないが、集論の法品において、自性般涅槃として次の如く説かれている。

「一切諸法は」不生なるもの(anuppanna)・不滅なるもの(aniruddha)・本来寂靜なるもの(saddhanta)・自性として般涅槃したもの(prakṛti-parinirvṛta)であるとはいかなる密意(abhisaṃdhi)であるか。無自性(niḥsvabhāva)であるからそれ故に不生であり、不生であるからそれ故に不滅であり、不生にして不滅であるからそれ故に本来寂靜であり、本来寂靜であるからそれ故に自性般涅槃である。

四種涅槃における本来清淨涅槃に相当する自性涅槃が滅諦のところで説かれないのは、この涅槃が不滅なるもの(aniruddha)と規定されているからであろうか。この自性般涅槃に相当する用語は、解深密經や瑜伽論にも説かれているが、先に言及した如く、無住処涅槃については、それに相当する概念は説かれていてもその用語は見られない。この無住処涅槃を無余涅槃より別出したのが集論において「最勝に關して」説かれた滅諦である。これが攝大乘論等の唯識系論書では、本来自性清淨涅槃、有余・無余涅槃とともに四種涅槃として列挙されるに至る。この様な四種涅槃の成立及び滅諦との関連の問題について

ては稿を改める必要がある。

以上考察した如く、集論に説かれた滅諦の構造を見ると、世俗的仮なる滅や不円満・無莊嚴的不完全な滅、あるいは有余・無余両涅槃は勿論、さらに生死や涅槃に住せず未来際を窮めて有情を利樂する無住処涅槃までを滅諦・涅槃であると規定している。このことは、説一切有部において、涅槃は無為法にして択滅であるとし、非学非無学の法にして常に常住不変であるとする説と明かに相違していると見るべきである。婆沙論三十三によれば、涅槃は転変不定にして有学・無学・非学非無学の三種ありとする涅槃転変説と、涅槃の性は学・無学・非学非無学に従って別々であると主張する涅槃決定説をとる二種の分別論者の説を否定している（大正・27・一六七〇）。ところが集論では、有学・無学・非学非無学なる滅・涅槃を立て、さらに彼分涅槃や択滅に非ざる無住処涅槃を立て、その中の無住処涅槃を最勝の滅であるとしている。また、婆沙論七十七では、阿毘達磨論師は滅諦を「彼択滅」であるとし、譬喩者は「業煩惱尽」、分別論者は「招後有爱尽」であると主張したという（大正・27・三九七a～b）。このうちの譬喩者とは経部のことで、分別論者とは上座部系の部派のことである。集論の所説はその中

では譬喩者の説にやや近い。

説一切有部においては、滅諦涅槃は、無為法にして択滅と名づけられ、択滅は離繫をもって性とし、その体は実有であり、性は善にして常であるとして、静的な意味に理解せられた。また、譬喩者・経部では、涅槃は、業・煩惱・諸苦の永滅に名づけたもので、別に自体のあるものではないと考えた。過去・現在の煩惱の種子を滅し、未来の煩惱・後有を生起せしめることを永断する分位に仮立したものである。上座部はこれを慧の功能による随眠の不生の位に仮立し、大衆部はこれを非択滅であるとしたと伝えられている^⑤。

集論における滅諦・涅槃観は経部の説に近いが、滅諦を仮有とせず、永遠なる真如の相として実体的に見ている。択滅ではないが、自性般涅槃を涅槃の中に数えるという考え方からもこのことが窺えるであろう。瑜伽論では、涅槃は有でも非有でもなく妙有寂靜・甚深・廣大・無量である^⑥と説かれた。この様な考え方は、経部が輪廻を実、涅槃を仮と見て、中観派が輪廻・涅槃とも空であると見る考え方と相異している。更に、集論において無住処涅槃を説くに至っては、寂靜なる涅槃にとどまらず、衆生を救済するため活動するというダイナミックなあり

方をもってくる。集論における滅諦・涅槃説はこの様に瑜伽論の所説に基づきながらも、それを真如という態でとらえ実体的に見るという方法論がとられている。この様な大乘阿毘達磨思想の滅諦・涅槃観は、涅槃を不生不滅の義として如来の法身と同視し、自性清浄の如来の法身を以て涅槃の体とする大乘佛教の涅槃観の形成に大きな思想的影響を与えずにはおかなかったであろう。

註

- ① Schnitzhausen, L., "Theories of Darśanamārga in the Yogācārabhūmi and Other Texts" 大谷大学佛教学会等共催講演会、(一九七八年三月六日於京大会館) 資料、一三～一四頁参照。
- ② 上杉宣明「阿毘達磨集論の有色・無色説について」印佛研 26—1 (昭52) 三三四～三三三五頁参照。
- ③ ASBh p. 156³⁴.
- ④ AS 6の部分は梵文散逸部分であるが、ASBh に於いては完全に回収される。kim upādāyēdaṃ śāstram Abhidharmasamuccayaḥ iti sametyōccayatām upādāya, samantād uccayatām upādāya, samyag-uccatvāyātana-tām cōpādāya. (ASBh p. 156²³⁻²⁵) 従って ASp p. 107¹⁶⁻¹⁷ における還元は次の様に修正すべきであろう。nāma labhate は不要 (ASBht にのみ miṇ bhag とあり、従って ASBh p. 156²³ におけるこの句も註釈の文であって引用ではない)。saṃkṣepatas tribhir arthaiḥ 不要。

samyag-uccayatām → samyag-uccatvāyātana-tām (AST yaṇ dag par mtho bāhi gnaṣ yin puhi...) (cf. 集論・大正・31・六九四a¹、AST 141a⁸~b¹、ASBht 143a⁶⁻⁹)
 * ASBh 24 uccayatvā² によるが、BASī 746² の AS 15 用いられ uccatvā² に修正した。

- ⑤ sametya rtogs nas / uccaya blus pa ste / BASī 746¹.
- ⑥ samanta kun nas / BASī 746².
- ⑦ 大乘阿毘達磨經の正体については今日の学界では未だ定説がない(国訳一切経、瑜伽部6 解題五〇八頁、同10 解題一頁、宇井伯寿「撰大乘論研究」(岩波・昭5) 五七頁、参照)。
- ⑧ samyak yaṇ dag pa / uccatva mtho ba nid / tyaana gnaṣ te / BASī 746².
- ⑨ 拙稿「阿毘達磨集論における心所法の定義」印佛研 22—1 (昭48)、「梵文阿毘達磨集論における煩惱の諸定義」佐々木現順編著『煩惱の研究』清水弘文堂(昭50)、「Textual Notes on the ABHIDHARMASAMUCCAYA」印佛研 25—1 (昭52)、「阿毘達磨集論における蘊界処建立の特質」印佛研 27—1 (昭53)。
- ⑩ 拙稿「阿毘達磨集論における滅諦の諸定義」印佛研 26—1 (昭53) (以下「拙稿A」と略す)。
- ⑪ 集論における章分けについては拙稿「阿毘達磨集論における蘊界処建立の特質」印佛研 27—1、三五頁参照。
- ⑫ 婆沙論七十七(大正・28・三九七b)に四諦に関する阿毘達磨諸論師・譬喩者・分別論者の異説をあげる。
- ⑬ 集論における梵文散逸部分の取扱については拙稿「書評 Walpole Rahula: Le Compendium de la Super-

doctrine (Philosophie) (Abhidharmasamuccaya) d'Asa-

nga」佛教学マニナ18 (昭48) 九一〜九二頁参照。釈論

の資料的価値については、拙稿「書評 Natthmal Tatia

(ed.): Abhidharmasamuccaya bhāṣyam」佛教学マニナ

52 (昭53) 八七〜九四頁、袴谷憲昭「Tatia校訂本 Abhi-

dhamasamuccaya bhāṣya」駒沢大学佛教学部論集∞ (昭

53) 二五五〜二六二頁参照。

⑮ ASP *sampatti*

⑯ ASP *sēsa*

⑰ ASP *aśesa*

⑱ ASP *agra*

⑲ Ast 107b⁵⁻⁶, 大正・31・六八一〇, cf. ASP p. 62a⁷, ASBh p. 74.

⑳ 拙稿△三三〇頁参照。cf. ASf p. 99.

㉑ N. Hakamaya "Asvabhāva's and Sthiramati's Com-

mentaries on the MSA XIV, 34-35," JIBS (印佛研)

XXVII-1 pp. 490〜488.

㉒ Ast mi ななみナミ版にナミ mig と読む。

㉓ Ast chos (*dharmā*) ななち漢訳「意」をナナ。

㉔ cf. ASch 681c.

㉕ W・ローレンス博士は長部11・Kevaddhasutta にナナ

"etha nāmañ ca rūpañ ca aśesaṃ uparujjati" (D I

p. 223^{2b})との関連を指摘するが(ASf p. 99)その前後から

すれば内容的には大念処経との関連の方が深いようである。

㉖ D-a III p. 801. 拙稿「瑜伽行派における滅諦観の特質」

真宗教学研究3 (昭54・11予定) 参照。

⑳ 高木俊一『俱舍教義』臨川書店再刊 (昭52) 二七四頁参

照。

㉑ ASBh p. 74¹⁰⁻¹², cf. ASBht 69a¹⁻², ASVch 733b.

㉒ この部分 ASf にナナ。ASBh, ASBht, ASVt, ASVch

にあるのび、註釈部分が ASch に混入したと見るべきな

(拙稿△三三二頁註③参照)。

㉓ yod kyañ yod la med kyañ med do ナナ ASch

に従って訳す。

㉔ この箇所は no'atthi ナナ A II p. 161²⁴ 等

により修正。

㉕ 後際未生・前際已滅・中際自相安住・因縁相続・果相続

という有為諸法差別の五相と相違したものを言う (大正・

30・六六二〇)。

㉖ ナナと記し gūd na yōñ dam shes hūri pa ham/lan

hūdebs pa ham sems pa ni ma sbros pa sbros par byas

pa yin no / (YBht 219a¹⁻⁵) ナナ「為戲論非所戲論」

に相当するところを「非戲論を戲論する」と訳してナナ

これは又バーリの appapañcari papañceti に対応する。

㉗ ASch 摧伏' ASP p. 63³ *uigraha*.

㉘ ASP p. 63⁴ *tadāṃśīla* ナナ Ast delhi yan lag

及び後述のバーリの例等ナナ *tadāṅga* ナナ。

㉙ この経に相当する雜阿含36 ナナ *tadāṅga* の訳語が見ら

れず、ただ「涅槃」となっている (大正・2・八四)。

㉚ R. C. Childers, *A Dictionary of Pali Language*, Kyoto

: Rinsen, 1976, p. 493b.

㉛ *tadāṅga-nibbuto ti tena vipassanāṅgena kilesanāṃ*

- nibbutattā tadanga-nibbuto. S-a II p. 326^{a-e} (Siamese ed.).
- ③ CPD, p. 256. *yaṅ aṅga* 2 link, joint, factor, cause の義をもつ。
- ③ tadanganibbānaṃ ti paṭhamajjhānādinaṃ tena aṅgena nibbānaṃ. (A-a IV p. 207⁹).
- ④ Pali Tipitakam Concordance p. 190 b.
- ④ tadanga-vinutti-ppattam kāmāvacara kusalecittam, Vism-mḥt (ed. by Dr. Rewatadhamma, Varanasi) II p. 560.
- ④ 大正・30・三三二^a。
- ④ ノートの集論註では次の三つの仕方、*tad-aṅganir-vāna* の語義を説明する (BASJ 567⁹⁻⁹)。
- (1) *ma lus pa las ma ḥdas pas dehi nnam graṇṇaṃ kyi myaṇ ḥdas dan/*
- (2) *ñon moṇs phyogs gcig spans pas yan lag des ḥdas pa dan/*
- (3) *gcig tu ma ḥes pas dehi yan lag gi myaṇ ḥdas sogs so //*
- ④ 成唯識論演秘巻第一本 (大正・43・八一七^{a-b})。
- ④ CPD, p. 25b *yaṅ aṅga* の第二義に *integrant part or subordinate division of a whole; a sort, kind* を挙げる。
- ④ 『俱舍教義』(前出)二七四頁参照。
- ④ 有学・無学位に円満たる条件について説く俱舍論賢聖品 64・65偈、及びその長行を参照されたい (AK p. 381, 大正・29・二八三^a)。
- ④ 四向四果と七聖の関係については、赤沼智善『原始佛教の研究』破塵閣、一五八〜一七七頁参照。
- ④ 婆沙論三十二 (大正・27・一六七^b〜一六八^c)。
- ④ Vism p. 509 etc. 宇井博士は、この二涅槃を原始佛教では現生のものと考えると考えた指摘している (『印度哲学研究第二』岩波・昭40、二三七〜二五八頁) が、これに対する異説もある (赤沼智善『原始佛教之研究』一四八頁、渡辺文麿「無余涅槃の始源的意義」印佛研9―二、五三六〜七頁)。
- ④ 大正・30・七四七^b〜七四九^c、尚、この部分についてはチン・ツト訳を中心にした L. Schmithausen, L. *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Vinīcaya-saṅgṛahaṇī der Yogācāra-bhūmi*, Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Süd- und Ostasiens, Heft 8, Wien, 1969⁹。
- ④ ASg p. 35¹⁸⁻²⁰, ASch 752a, これとほぼ同じ内容の文が解深密経二 (大正・16・六九四^b) 及び瑜伽論七十四 (大正・30・七〇六^a) にあり。
- ④ 前註参照。
- ④ 佐々木月樵『漢訳四本対照撰大乘論』改訂新版、臨川 (昭52) 九五頁、撰大乘論世親積十三 (大正・31・二四七^{a-b}、新導成唯識論四四七〜八頁等参照。
- ④ 拙稿「アビダルマ佛教的判釈の諸相」大谷学報57―一、(昭52) 五九〜六三頁参照。
- ④ 俱舍論六 (大正・29・三三^c〜三五^a) 及び順正理論十

七(大正・29・四二八c~四三五b)では釈滅・離繫・涅槃の諸問題が、有部・經部・上座部・大衆部等の所説を中心に詳しく論じられている。

⑤7 瑜伽論八十七(大正・27・七九〇c~七九一a)

※ 本稿では特に左記の資料を依用した。略号と使用相当箇所を示す次の如くである。

ASp……Pradhan, P. (ed.), *Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, Santiniketan : Visvabharati, 1950, pp. 74-76.

ASt……北京版“Chos mñon pa kun las btus pa.”
大谷目録 No. 5550. 影印北京版112・107b~109b.

AStD……デルゲ版“Chos mñon pa kun las btus pa.”
東北目録 No. 4049. Sems tsam 90b~92b.

ASf……Rahula, W. (tr.), *Le Compendium de la Super-doctrine (Philosophie) (Abhidharma samuccaya) d'Asaṅga*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, 1971, pp. 99-104.

ASBh……Tatia, N. (ed.), *Abhidharmasamuccayaḥṣyam*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976, pp. 74-76.

ASBht……北京版“Chos mñon pa kun las btus paḥi bśad pa.” 大谷 No. 5554. 影印北京版113・67a~68b.

ASch……大乗阿毘達磨集論‘大正・31・六八一c~六八二a’。

ASVch……大乗阿毘達磨雜集論、大正・31・七三三a~七三四a。

国訳雜集論……国訳『大乗阿毘達磨雜集論』印度撰述部14、瑜伽部10、東京・(大東出版) 昭52、一七五~一八一頁。

その他略号

ASg……Gokhale, V. V. “Fragment from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga.” *Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society*, N. S. vol. XXIII, (1947).

拙稿A……拙稿「阿毘達磨集論における滅諦の諸定義」
印度学佛教学研究26—2(昭53)三六九~三二二頁。

YBht……Rnal-hbyor spyod paḥi sa nam par gñan la dñab pa bśad ba (Peking ed. N. 5539)
影印版 vol. 111.

BAST……Bu Ston's Chos mñon pa kun las btus kyī tñka nman bśad : Nimaḥi ḥod zer zhes bya ba, *The Collected Works of Bu-Ston*, Part 20, New Delhi, 1971.

その他の略号は慣例に従う(ペーリー氏 CPD. の Bibliography に参照)。

文及び註の中でサンسكريットがイタリックで表示してあるのは、還元であることを示す。

(本稿は昭和五十三年度文部省科学研究費一般研究Dによる研究成果の一部である)